

KM Report

知
KMSJ

VOL. 19

2006 January



CONTENTS

花村 邦昭 巻頭言
ドラッカー氏の思い出
研究部会レポート
最近のKMニュース
KM第9回年次大会プログラム
知的資産経営をめぐる最近の動き
役員 / アドバイザリーボード等
インフォメーション

閉じた組織は腐敗する

(株)日本総合研究所 特別顧問 花村 邦昭

いまあちこちで組織腐敗現象が見られる。いずれも閉じた組織がもたらす病理である。

組織はつねに四つの環境条件に対して開かれていなければならない。閉じた組織では、いくらコンプライアンスを声高に叫んでも空念仏に終わるだけである。開かれた組織のみがその病理から免れることができる。

組織は次の四つの側面で内外に対して開かれていなければならない。

第一に、市場への開かれである。自らが市場の公正な形成主体であるだけでなく、自らの内部に進んで市場の風を吹き抜けさせることである。市場すなわち顧客の目で自らの振舞いを不断に見直すことである。

第二に、民主主義的な公共空間へと自らを解き放つことで、自らの組織風土をつねに民主主義的に再構築することである。民主主義的な組織運営によって成員各人の創発的意欲を最大限に喚起しその自由な活動を保証することである。

第三に、技術環境のなかに正しく棲み込むことである。技術生態系秩序のなかで自分の位置取りを確かなものにする努力を不断に怠らず、組織を越えて広がる技術ネットワークのなかで他から不可欠の存在として認知されることである。

第四に、付加価値連鎖系を生成する一員として、なくてはならない機能環の役割を十全に果たすことである。最終的な消費者に届くまで最高の品質価値を作り込むべくすべてのステークホルダーとの間で効果的な協働を組成することである。

以上の四つは、「閉じた組織」の枠組みに囚われていては実現できない。これらが可能なのは唯一「開かれた組織」のみである。これを基礎にしてはじめてビジネス・エシックス(企業倫理)が実現する。

「開かれた組織」においては従来のマネジメント概念も変容する。そこでは上からの一方的な 管理・統制・指示・命令 はそれだけでは意味を成さなくなる。それらには 相互学習・相互理解・相互支援。相互信頼 という新たな意味が盛り込まれる。つまり、 管理 は、組織の失敗を極小化するために逸脱現象をいかに制御するか から 失敗(成功)体験を共有することによって互いが何を学び合うか へと意味内容が豊富化される。同様に 統制 は、組織権力を強化することによっていかに場を規範的に秩序づけるか から 相互理解を深めることでいかに場を活性化するか へと重点移行される。 指示 は、ノルマ的な成果目標の割り付けとマニュアル的な行動指示 から 自発的な参画と相互支援が最も高く評価される組織文化の形成 へと価値転換される。 命令 は、人は命令しなければ動かないという固定観念 から 相互信頼のないところでは何事も始まらないという健全な常識 へと置き換えられる。こうして組織は<静態的な閉じた秩序体>から<動態的なプロセス>へと開かれる。 管理・統制されることに馴らされた指示・命令待ちの人間集団 から 創発的意欲と協働意欲に溢れた「やる気」集団へと再組織化される。これを基礎にしてはじめてコーポレート・ガバナンス(企業統治)は成立する。

しかしながら、コンプライアンス、ビジネス・エシックス、コーポレート・ガバナンスが十全に機能するためにはこれだけでは充分ではない。何よりもこれらを根底で支える組織成員一人ひとりが「強い自己」でなくてはならない。この「強い自己」はどうすれば練成されるか、それがいまや最大の組織課題である。

組織にあっては、人間は二重の人格の間で引き裂かれた存在である。一つは機能的な役割存在としての「組織人格」であり、いま一つは固有名をもった人格存在

としての「個人人格」である（バーナード）。人はこの二つの矛盾葛藤（ダブル・バインド）を何とか調停しながら日々を生きている。その調停努力を通して人は自らの内部に確固たる倫理道徳的座標軸を形成しなければならない。それには覚悟を伴う決断が要る。「百万人といえども吾ゆかん」の気概も求められる。勇気と玲持もなくてはならぬ。その自覚がなく、つねに座標軸がぐらついている人間が組織不祥事を起こすのである。昨年来世間を騒がせている建築士による耐震強度偽装工作をはじめ、その例は枚挙に遑がない。

キリスト教の倫理が生活の隅々にまで浸透している欧米ならまだしも、社会倫理や個人道徳が依るべき普遍的根拠をもたないわが国の現状では、頼れるのは「開かれた組織」が拠って立つ 組織規範、組織倫理 だけである。そして、それを担うのはその体現主体である「強い自己」を措いて他にない。

では、そのような「強い自己」として、われわれはどのような人間像を思い描けるだろうか。それは、上記の矛盾する人格の間で、相互否定的な契機を内包したまま、それらが融即的に調停された統合人格である。いわば「絶対矛盾的自己同一（西田幾多郎）」の世界を生きる人格、「即非の論理（鈴木大拙）」を体現する人格である。

この 融即的統合人格、矛盾的自己同一存在 は、その内部に抱え込んでいた 覚悟・決断・決意 などの作意もすべて洗い落として、無私の境地 へと自己超脱した人格である。そのような人格の体現者については、たとえば『正法眼蔵随聞記』から次のような言説を引証することができる。「所詮は事に触て名聞我執を捨つべきなり」、「道理を以て身の始終を尋ぬべし」、「心の内に上下親疎を分たず、人の為によからんと思ふべきなり」、「即ち吾我を離るゝ、第一の用心なり」。『臨濟録』も言う。「透脱自在」、「無依の道人」、「随处に無事」、「無事にして純一無雑」、「随处作主、立処皆真」。『碧巖録』も言う。「是れ人を争い我を負い、自ら遅しくし

自ら誇るにはあらず。…一に七縦八横なるに任す」、「本来無事」。『歎異抄』でも同様のことを云う。「信心さだまりなば、往生は弥陀のはからはれまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず」、「これ自然なり。わがはからはざるを、自然とまうすなり」。これらはいずれもわれわれ凡人には望むべくもない境地であるが、少なくともわれわれはそれを目指して努力することはできる。その窮極が「身心脱落」、「自然法爾」である。

最後にもう一度『正法眼蔵』から引く。「仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をならふとは、自己をわするなり。自己をわするといふは、万法に証せらるゝなり、万法に証せらるゝといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり」。「まさにしるべし、…悉有を会取することかくのごとくなれば、悉有それ透体脱落なり」。「強い自己」とはこの 無私の自己 のことである。

このような 自在の境地 無私の自己 に達すれば、人は 組織人格 か 個人人格 かなどに拘泥することなく自由に状態空間を横断していくことができるようになる。それでいてけっして軌道を踏み外すことがない。その軌跡のなかで豊かな経営空間がダイナミックに開かれる。「開かれた経営」とはまさにその 軌跡の集合 である。それが「強い自己」による「開かれた組織」が至り着く窮極境地に他ならない。その「開かれた経営」の場において真に「強い自己」が耀き出るのである。

日本ナレッジ・マネジメント学会 理事長 森田 松太郎

ドラッカーさんについては色々な人が思い出を書いています。私も多少の思い出を書いてみようと思います。

1990年代において当時の朝日監査法人はアーサー・アンダーセンの世界組織に加入していました。

私がドラッカー氏に会ったのは、1996年アーサー・アンダーセンの年次大会時にアーサー・アンダーセンのトップであったデイク・ミゼール氏がドラッカー氏を囲んで4、5人で昼食をとるので良ければ一緒に食べないかと誘われ、たまたま私の席がドラッカーさんの隣であった。それがご縁でその後何回かお会いすることになりました。

その時代ドラッカーさんはアーサー・アンダーセンの顧問でした。最初にお会いしたのがドラッカーさんの隣であったのが僥倖で、日本のことについて色々とお話しました。

そのとき感じたのは、日本のことを良く知っている人だということでした。

私は、朝日監査法人の理事長を退任してから、1980年代には昇る太陽であった日本が沈む太陽といわれていた原因は何なのか、その間アメリカの経営力の向上は何処からきたのかについて疑問を抱くようになりました。どうやらその原因の一つはベスト・プラクティスとかベンチ・マーキングと言うような経営手法にあるように思い、ナレッジ・マネジメント学会を設立して周知を集めて研究したいと考え、たくさんの人々と語り合っただけで日本ナレッジ・マネジメント学会を立ち上げました。

ナレッジ・マネジメントの研究と実務は、その時代一番プラクティスの進んでいるアメリカの実際を学ぶのが一番だと考え1999年に学会員を中心に視察団を形成しました。折角アメリカに行くのならクレアモントでドラッカーさんにKMの話の伺うのが一番ということになり、たまたま私は家内とアメリカに行くチャンスがあったのでドラッカーさん宅を伺いセミナーで

話をしてもらえるかについてお願いしてみようと考えました。

ドラッカーさんに自宅訪問について依頼した結果OKを貰えたので1998年6月29日午前10時頃自宅を訪問しました。クレアモントの先生のお宅は住宅地の閑静な所でした。先生のお宅に日本の古い掛け軸とか仏像、素敵な陶磁器が置かれていたのでどこで手に入れたかお尋ねしたところ日本の鎌倉とか京都で購入したとのことでした。

もし興味があるのなら家中案内すると言われ、素晴らしい日本の作品を鑑賞させて貰いました。ドラッカーさんの造詣と審美眼の素晴らしさには正直いって驚きました。

昼近くになりランチにいこうということになり、私がタクシーを呼びましょうかとお伺いしたところ、「私が車を運転するから一緒に行こう」と言われ、車はトヨタのカリーナでこの車は大変良い車で気に入っているとのことでした。古美術といい車と言いドラッカーさんは心底日本が好きなのだと思えました。

町の中心まで車でいきましたが、自分はイタリアンが好きだがそれで良いかときかれまして。勿論反対する理由がありませんからOKいたしました。

レストランで驚いたのは、ドラッカーさんが3人しかいないのに4人前オーダーしたことです。お孫さんでもジョインするのかと思ってお伺いしたところ私が2人前食べるのだと言われ、本当に2人前召し上がったのには驚きました。ドラッカーさんが若さを保ちエネルギーギッシュの活躍されている秘密は旺盛な食欲にあるのだと思えました。

ドラッカーさんのお宅で色々なお話を伺いましたが、丁度日本はバブル崩壊後で日本中が意気消沈している最中でした。ドラッカーさんは必ず日本人は又経済を盛り返すから心配は要らないと言われました。ドラッカーさんは長い日本の歴史を見ると、必ず困難を克服して発展してきた点を上げ、日本人は素晴らしい力を持つ

ていると自信を持って指摘しました。

自分の物の見方は表面の漣を見るのではなく、海の底を流れている潮流をみて判断していると言っていたのは大変印象に残りました。たとえば株式の相場についても、自分は刻々の変化については分からない。したがって株式は全部売却したので相場の上げ下げに一喜一憂することはないとのことでした。

ドラッカーさんの物の見方は絶えずそのものの本質を見ていると思います。たとえば地震の場合で考えると、地上に現在起きている地震でなく、地中のマグマがどのような状態になっているか、その結果地震は何時ごろ起きるかそしてその規模はどの位かを予見することです。ドラッカーさんの意見はいつでも本質を見ているので、その時代には合わなくても10年単位で考えるとそのようなになっている場合が多いのです。

我々がクレアモントで1日セミナーを受けたとき、女性が1人参加していました。ドラッカーさんはアメリカも昔は今日のセミナーと同じ状態であったが、今日では参加者の約半数が女性で今昔の感があるいわれ、何年後には日本も同じ状態になるでしょうと言っていたのは印象に残りました。

又、日本のGNPは家庭の主婦の労働力を評価していないので、少なく評価されている。仮に家庭の主婦の労働を何かの基準で評価すれば、GNPは相当なものになる筈だと言っていました。何か盲点を突かれた思いでした。

ドラッカーさんは人間の持っている知識の資産性について指摘されていましたが、私は色紙に以下のことを書いてもらいました。

ドラッカーさんは日付けを書くとき、今年は何年かと聞かれました。日本に関する知識の豊富さには大変驚きました。

ドラッカーさんは組織について、大きな組織は管理が難しいと言っていました。彼は大学についても大人数の大規模な学校には興味がなく、特に学校運営のポジションには興味が無いと言っていました。自分にはクレアモント位の規模が一番良く、見通しがきくので学問に集中できるので気に入っているということでした。その時朝日監査法人はどの位の人数がいるかと質問され2,000人以上いると答えたらよく管理が出来るねと言われ恐縮しました。

彼の意見では一単位50人くらいでしたら見通しが利くので良いが、それ以上になると難しいので一つの単位は50人くらいで纏めるのが良いと言われ考えさせられました。組織で考えると軍隊の組織は合理的です。分隊、小隊、大隊、師団と言う具合に組織は次第に大きくなりますが、小隊長は分隊長を抑え、大隊長は小隊長を抑えるのでうまく行くのかも知れません。

ドラッカーさんは年間多数の本をお書きになっていますが、どのようにして書かれるのかお尋ねしたところ、書きたい本の内容はまずテープに録音し、それを起こしたものに手を入れるのだということでした。書きたい内容は全部頭の中に入っているのでしょうか。セミナーは一日中行われましたが、メモ等は一切ご覧にならないのには驚きました。何を用意したら良いかについてお尋ねしたところ、安楽椅子を一脚ステージの上においてくれれば良いとのことでした。

To Matsutaro Morita

Knowledge worker productivity is one most important challenge

Clermont, California

Heisei, 10/15/10

Peter F. Draker

リスクマネジメント研究部会

部会長 眞崎 達二郎

平成 17 年度リスクマネジメント研究部会の例会は次の通りであった。毎回多数参加され成果が上がっているが、ご関心のある向きの参加を歓迎します。

時間は 6 時 30 分から 8 時 30 分まで

場所は東京富士法律事務所にて開催

- (1) 1 月 27 日 (木)
今年度研究方針の具体化について 名合副部会長
- (2) 2 月 24 日 (木)
資生堂のリスクマネジメント
報告者 (株) 資生堂 総務部部長 山田 敦則
- (3) 3 月 29 日 (火)
資生堂のリスクマネジメントに関する議論
- (4) 5 月 10 日
事例研究 (株) パルコの紹介と議論
- (5) 6 月 13 日
東京ガスのリスクマネジメント
東京ガス株式会社監査部主席 吉野 太郎
- (6) 7 月 20 日
リスクマネジメントの視点から見た取締役の責任
小沢 徹夫
- (7) 9 月 14 日
出席者全員から「RM に関する最近の状況」の報告と議論
- (8) 10 月 19 日
リスクマネジメントについて
大村 岳雄
- (9) 内部監査見直しのためのミッションとアプローチの整理
藤井 範彰

企業評価研究部会

部会長 田中 孝司

企業評価研究部会は毎月ルコピルの 1 階にて開催された。内容は次の通りである。

(1)	5 月 16 日 (月)	18 : 30 - 20 : 00	知的資産研究部会との合同研究
(2)	6 月 16 日 (月)	18 : 30 - 20 : 00	IC RATING の考え方
(3)	7 月 12 日 (火)	18 : 30 - 20 : 00	2005 MAKE-J の調査について IC リサーチャー制度の研究
(4)	9 月 12 日 (月)	18 : 30 - 20 : 00	中小企業向け IC リサーチャー制度の検討
(5)	10 月 16 日 (火)	18 : 30 - 20 : 00	2005 MAKE-J 調査の確認 中小企業向け IC リサーチャー制度の検討
(6)	11 月 8 日 (火)	18 : 30 - 20 : 00	知的資産経営報告の動向について 中小企業向け IC リサーチャー制度の構築に向けて
(7)	12 月 13 日 (火)	18 : 30 - 20 : 00	2005 MAKE-J 調査の結果報告 中小企業向け IC リサーチャー制度の試行に向けて

最近のKMニュース

台北 KM 会議レポート

平成 17 年 10 月 20 日 台湾台北市において China Productivity Center 主催の KM セミナーに KM 学会理事長に対しキーノート スピーチの依頼があり、森田が台北にいきキーノート スピーチを行った。

セミナーのプログラムは次の通りであった。

2005 Knowledge Management Conference, Taiwan 2005.10.20 (Thursday)

9:00 - 9:30	Opening Remarks
9:30 - 11:00	KM practice in Japan : Matsutaro Morita
11:00 - 12:00	KM Development and Change in Taiwan : CPC GM Dr. Chen
12:00 - 13:00	Lunch
13:00 - 16:00	ICM Practice in Alaxaia : Hiroyuki Wada

Intellectual Capital Management : Toshihiko Mitamura 2005.10.21 (Friday)

9:00 - 12:00	Knowledge Management ; J.K. Suresh
12:00 - 13:00	Lunch
13:00 - 14:30	KM Practice in Taiwan : CPC Manager
14:45 - 16:00	KM Panel Discussion

参加者は台湾の生産性本部の会員企業の部課長クラスであった。年齢は 30 代が圧倒的多数であった。女性も多く見られた。KM に対する関心が深くまた Intellectual Capital についても大変興味を示し、これから台湾においても研究を促進したい意向がみられた。

通商産業省における「市場価値と知的資産」研究会が発足した。

株式会社オールアバウトが知的資産経営報告書 2005 を発表した。同社は平成 17 年 9 月ジャスダックにリストした会社である。

内容は次の通りである。

1. マネジメントメッセージ
2. 経営哲学
3. 今後の経営ビジョン
4. 価値創造の流れ
経営哲学を実現していく価値創造の流れ
知的資産（ストック）の概要
知的資産を活用したフローの流れ
5. これまでの実績
当社を取り巻く環境
これまでの知的資産経営の成果
収益ハイライト
6. 今後の展開
消費の変化と市場環境の変化
今後の経営戦略
7. IC Rating とは
8. ファクト データ
9. 会社概要

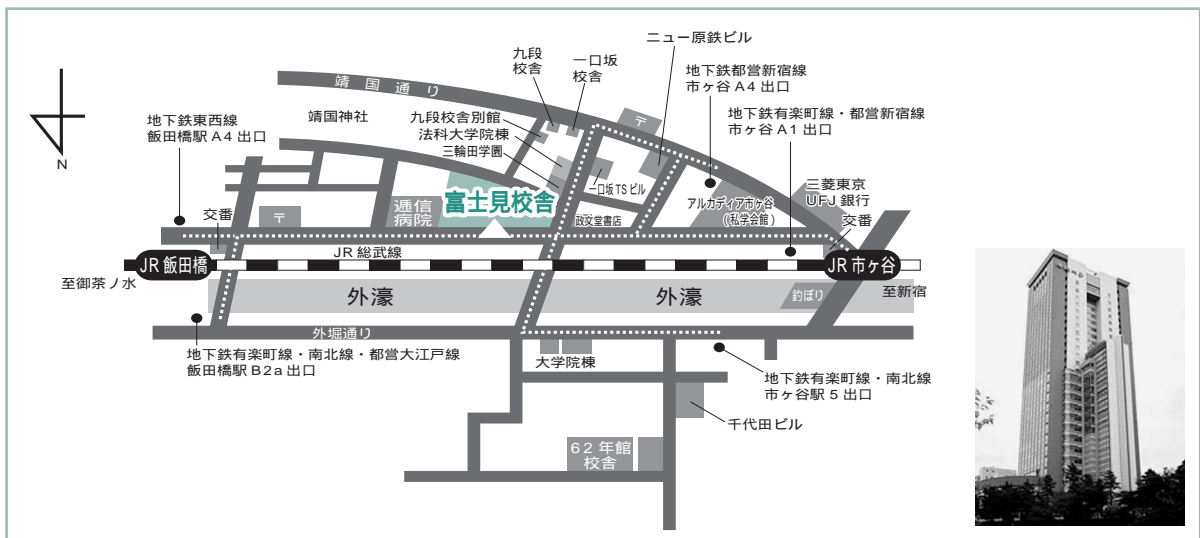
- 日 時：平成18年3月17日（日）
- 場 所：法政大学ポワソナード・タワー スカイホール（26F）
- 第9回年次大会長：小門 裕幸（法政大学キャリアデザイン学部教授）
- 総合司会：芝坂 佳子（あずさ監査法人知的財産戦略室）

- プログラム -

9:30	受付開始
9:50	開会宣言 学会賞・MAKE表彰の発表
10:10	特別講演 住田 孝之（経済産業省 知的財産政策室長）
11:10	研究発表1 田中 孝司（企業評価部会 部会長）
11:50	昼 食
昼食時に24F会議室にて理事会を開催いたします。	
13:00	年次総会
13:30	研究発表2 眞崎 達二郎（リスク・マネジメント研究部会 部会長）
14:15	研究発表3 「全日空のKM」 沢谷 みち子（全日本空輸株式会社）
15:00	休 憩
15:30	研究発表4 喜田 昌樹（組織認識論研究部会 事務局）
16:10	研究発表5 吉田 茂（株式会社イビザ 取締役会長）
17:00	懇 親 会 26Fラウンジにて開催

当日、プログラムが変更される場合がございます。

会場地図



知的資産経営をめぐる最近の動き

- OECD 国際会議（イタリア・フェラーラ）および知的資産ウィーク報告 -

あずさ監査法人 知的財産戦略室 芝坂 佳子

知識社会における競争力の源泉は見えざる資産のマネジメントにあることが、ますます強く意識されるようになってきています。ナレッジマネジメントへの理解が、極めて狭い範囲のみに認識にとどまっていた時期もあったように感じられますが、昨今の知的資産経営をめぐる様々な動きは、ナレッジマネジメントの本質的な実践として捉えることができると考えています。

本レポートでは、2005年10月にイタリア・フェラーラで開催されたOECD国際会議「知的資産とイノベーション：知識社会における価値創造について」、および、11月末に企画された日本における知的資産ウィークについて報告します。合わせて、今後の課題についても紹介し、幅広く有意義な議論の活性化の一助になれば、と思います。

1. OECD 国際会議

「知的資産とイノベーション：知識社会における価値創造」

2005年10月20-22日、イタリア・フェラーラにおいて、OECDとフェラーラ大学により共催されました。本会議は、現在、OECDで日本も提案国となって進められている「知的資産と価値創造プロジェクト」のマイルストーンとしてとらえることができます。

参加者は、200名弱で、そのうち、日本人の参加者が約20名（欧州在住者を含む）にのぼり、そのうちスピーカーも10名おり、本分野への関心の高さと貢献を、広く印象付けることになりました。一方、米国からの参加者は極めて少数であり、ビジネス課題と取り巻く環境の相違を象徴していると思われます。

3つのプレナリーセッションと、5つのパラレルセッション（13のテーマ）により議論が行われました。それぞれのテーマと日本からのスピーカーは次の通りです。

プレナリーセッションⅠ

知的資産と価値創造：イノベーションと成長の要因

（早稲田大学花堂靖仁教授）

プレナリーセッションⅡ

知的資産と価値創造：企業の成功事例

（日本電気株式会社広崎彰太郎氏）

プレナリーセッションⅢ

知的資産と価値創造：政策対話（経済産業省住田孝之氏）

パラレルセッションⅠ

a: イノベーションとR&Dによる価値創造（中央大学高橋琢磨教授） b: 戦略的資産としての人的資本

パラレルセッションⅡ

a: 知的財産の評価と開発（横浜国立大学岡田依里教授） b: 組織を超えて：知的資産の関する企業と空間的視点、

c: 企業の知的資産に関する財務と非財務報告（早稲田大学花堂靖仁教授）

パラレルセッションⅢ

a: 知的資産としてのブランドとレピュテーション、b: 大学と研究機関における経営と知的資産報告、c: 知的資産に基づく価値創造に関する報告の充実（アクセル株式会社船橋仁氏）

パラレルセッションⅣ

a: 知的資産としてのソフトウェアと組織力、b: 価値創造のための外部リソースと知的資産の連携：投資家の役割（日本政策投資銀行野田健太郎氏） 価値創造に関する報告：サステナビリティとCSRからの教訓（富士通株式会社前川和義氏）

パラレルセッションⅤ

a: 格付、信用評価、財務分析：知的資産の役割、b: 中小企業における知的資産経営とその開示（株式会社オールアバウト江幡哲也氏）

経済産業省を中心に日本での検討がすすんでいる知的資産経営報告や、それに先立つ知的財産報告書への取り組みは、強い関心をもって受けとめられました。同様に、各国の経済的状況を背景とした特色ある施策が紹介され、知的資産が経済活動、その結果としての価値創造に密接に関係しているとの共通認識を確認することができました。

見えない資産を活用するためには、個別のオペレーションレベルの高度化に加え、組織活動全体を捉えた統合的なアプローチが肝要です。これには、困難な点も多くあり、知的資産の可視化や評価/分類体系等の向上、報告開示体系の検討等を通じた、知的資産経営実践の事例蓄積が今後、ますます重要になってくると考えられます。

本会議により共有された多くの知見が、国/地域/組織の実践の場で活かされ、多くの価値創造に貢献していくことを期待したいと思います。

なお、会議の様子や使用されたプレゼンテーション等については、<http://www.ferraraontangibles.net/>で閲覧することが可能です。

2. 知的資産ウィーク

知的資産ウィークは、知的資産経営の重要性を認識する関係者が、組織の壁を越えて連携し開催された画期的なものでした。共通のビジョンやミッションをベースに協業するコミュニティは、まさしく、ナレッジマネジメントにおける知識創造の場であったと感じています。

知的資産ウィークには、主として以下のようなイベントが開催されました。

日	イベント	主旨	内容
11/25 (金)	大阪大学大学院公開講義「知的資産を活用した経営と法」	法的な観点からの検討	大阪で開催。経済産業省住田孝之氏講演に引き続き、企業関係者、公認会計士等をまじえたパネルディスカッション。
11/28 (月)	早稲田大学知的資本研究会ワークショップ	アカデミックな視点からの検討	Marne-La-Vallee 大学 Bounfour 氏、OECD 田中伸男氏が講演。その後、経済産業省住田孝之氏、Leif Edvinsson 氏との議論を展開。
11/28 (月)	知的資産経営コンソーシアム設立会議	知的資産経営の浸透推進を目指す任意組織立ち上げ	当初メンバー約 90 名中、約 50 名が参加。知的資産経営の浸透や実践をめざした意見交換等を行う。
11/29 (火)	日経知的財産フォーラム	日経主催による企業関係者向けのイベント	1700 名超の応募。「日本企業の強さの源泉を探る」をテーマに、知的財産と知的資産の視点のブリッジを試みる。
11/30 (水)	経済産業研究所政策シンポジウム「知的資産経営の強化による企業価値創造」	政策的観点からの議論、現状認識と整理等	参加者は 150 名程度。幅広く、かつ高度な議論が展開された。

知的資産をキーワードに、立場や背景の違う人々が意見を表明しあうなかで、価値創造とその実践のための施策、組織の意義や役割などについて、それぞれに、認識が深まってきました。さらに、参加者個人のおかれた“場”での実行にむけたヒントが、多く示されました。これらを整理すると次のような点になると思います。

- 知的資産経営 (= 知識経営) の実践には、トップマネジメントの役割 / 責務が極めて大きい。
- 知的財産は知的資産経営の成果のひとつであり、具体的な企業行動を支援する差別化要因である。そして、組織に対する経済的な貢献に意義があり、また、期待されている点である。
- 知的資産の可視化と報告は、知的資産経営実践の促進要素となるが、その土台となり、信頼性の高いレポートングを実現、支援するための態勢構築が不可欠である。
- 知的資産に関する各国の取り組みには特徴があり、経験や知見を共有することで、経済の国際化に対応できるなんらかの基準作りが必要となってくると考えられる。
- 個別具体的な知的資産経営の実践の推進が奨励される。そのためには、政策的 / 制度的な支援の検討が肝要である。

3. まとめ

知的資産経営の推進は、組織や立場、専門性、集約されてきた知識や方法論の活用等を通じた戦略的かつ統合的なものです。また、過去から現在、そして未来への連続性の中で、取り組まれる課題でもあります。

同様に、知的資産経営への取り組みには、中長期的な視点が不可欠です。多くの企業が長期間におよぶ低迷期から脱却しつつある今こそ、社会変化への柔軟性を備えた持続的な成長のベースを形成するための施策に着手すべき時期である、と確信しています。

<2005年12月31日現在>

平成17年度末における学会の組織内容は以下のとおりである。

■ 役員

会長	奈良久彌	((株)三菱総合研究所 特別顧問)
副会長	野田一夫	(多摩大学名誉教授)
副会長	小井戸雅彦	((株)日本総合研究所 特別顧問)
評議員会議長	若月三喜雄	(元日本銀行理事)
評議員会副議長	吉村久夫	((株)日経BP社代表取締役相談役)
評議員会副議長	元田充隆	(U F J 総合研究所取締役社長)
理事長	森田松太郎	(A R I 研究所理事長)
副理事長	嶋口充輝	(慶應義塾大学 教授)
副理事長	高梨智弘	((株)日本総合研究所 理事)
専務理事	加護野忠男	(神戸大学経営学部教授)
専務理事	一條和生	(一橋大学 教授)
専務理事	久米克彦	(スズキ株式会社常勤監査役)
専務理事	山崎秀夫	(野村総合研究所上席研究員)

■ アドバイザリーボード

花村邦昭	(日本、(株)日本総合研究所 特別顧問)
野中郁次郎	(日本、一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授)
カーラ・オデル	(米国、アメリカ生産性品質センター理事長)
ディック・ミゼール	(米国、エクサント銀行CEO)
竹内弘高	(日本、一橋大学大学院国際企業戦略研究科長)
トム・ダベンポート	(米国、バブソンカレッジ・ディレクター)
ピエール・ファイヤード	(ブラジル、仏伯科学技術情報センター長)
ローリー・チェイス	(英国、テレオス社代表)
ウオルトラウト・リッター	(香港、香港ナレッジマネジメント協会議長)

■ 評議員 (50音順)

石井威望	(東京大学名誉教授)
石原邦夫	(東京海上日動火災保険 代表取締役社長)
江原優	(東京エグゼクティブ・サーチ(株)代表取締役会長)
大森康彦	(Anti-Aging Doctors Inc. 取締役会長 兼 社長)
唐津一	(東海大学開発技術研究所教授)
岡井紀道	((株)日経統合システム 代表取締役社長)
坂本吉弘	(アラビア石油社長)
椎名武雄	(日本アイ・ビー・エム(株)最高顧問)
下田邦典	(NPO法人 ITコーディネーター協会専務理事)
神野直彦	(東京大学大学院経済学研究科長)
杉之尾宜生	(戦略研究学会理事・事務局長)
関隆明	(NECソフト(株)代表取締役社長)
田中榮	((株)大和総研理事長)
張富士夫	(トヨタ自動車(株)会長)
寺島実郎	(三井物産戦略研究所所長)
常盤文克	(元花王株式会社会長)
浜田広	((株)リコー特別顧問)
福地茂夫	(アサヒビール(株)会長)
宮原明	(富士ゼロックス(株)副会長)
師岡孝次	(東海大学名誉教授)
横溝陽一	(i2テクノロジー・ジャパン(株)代表取締役社長CEO)

■ 理事 (50音順)

阿片公夫	(虎の門経営企画(株)代表取締役社長)
石川昭	(青山学院大学大学院名誉教授)
生田哲郎	(生田・名越法律特許事務所弁護士)
石崎忠司	(中央大学商学部教授)
一柳良雄	((株)一柳アソシエイツ 代表取締役社長)
岩岡保彦	(イワオカR&C 主任研究員)
岩本繁	(全国JA監査機構監査委員長)
上野守生	(亜細亜証券印刷(株)社長)
内田和成	(ボストン・コンサルティング・グループ日本代表)
岡田依里	(横浜国立大学大学院教授)
岡本正耿	((株)MPC代表取締役)
尾原重男	((株)三菱総合研究所常勤顧問)
木川田一榮	(富士ゼロックス(株)KDIグループポレト・ナレッジ・ランサー)
喜田昌樹	(大阪学院大学企業情報学部助教授)
国領二郎	(慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授)
瀬川大介	((株)リコー執行役員 総合経営企画部長)
高橋均	(文教大学大学院教授)
田坂広志	(多摩大学大学院教授)
田中孝司	((株)熊谷組CS推進室長)
谷口恒明	((財)社会経済生産性本部理事)
寺本義也	(早稲田大学大学院教授)
眞崎達二郎	(元シュプリンガーフェアラーク東京(株)編集顧問)
矢澤洋一	(日経BP社常勤監査役)
吉川宗男	(ハワイ大学名誉教授)
山田英夫	(早稲田大学アジア太平洋研究センター教授)

■ 監事 (50音順)

境健一郎	(かんき出版(株)代表取締役社長)	富尾一郎	(川澄化学工業社長)
------	-------------------	------	------------

Information



おしらせ

『経済産業新報』が、ナレッジ・マネジメント学会の提携紙に!!!
— 50%OFFで購読できます。—

このたび、日本ナレッジ・マネジメント学会では、コミュニケーションと情報発信力を強化するため、『経済産業新報』を提携紙として指定致しました。同紙は、創刊57年を誇る、経済産業政策の動向やハイテク産業の動きを伝える新聞として知られています。ナレッジ・マネジメントに対する理解も深く、今後同紙と密接な関係を持って、“ナレッジ(知)の普及”に努めていく所存です。学会活動に追加して、今後同紙の紙面を使い、学会員の皆さまにナレッジ・マネジメントの最新動向等を毎号お伝えしていきたいと、同紙の編集長が約束してくれていますので、ぜひ、学会員が新聞紙上で論文等を載せたい場合には、ご投稿下さい。購読等の申し込みは、同紙ホームページで『日本ナレッジ・マネジメント学会会員』と明記してお申し込み下さい。 <http://www.keizaishinpo.jp/>

● 新会員を募集しています

当学会は、ナレッジ・マネジメントに興味を持ち、研究意欲を有する法人・個人であれば、特に入会資格を制限しておりません。学会の活動にご参加いただける方がいらっしゃれば、是非参加を呼びかけてください。申し込みに必要な書類一式は、当学会事務局からご郵送いたしますので、必要に応じてご請求下さい。

● お申し込み方法

法人会員：「法人入会申込書」に必要事項をご記入の上、下記の当学会事務局宛までご郵送して下さい。折り返し請求書、登録内容の通知書、会員名簿、研究年報及び最新の会員報を送付させていただきます。なお、法人会員は窓口担当者を合計2名まで登録できます。

個人会員：「個人入会申込書」に必要事項をご記入の上、下記の当学会事務局宛までご郵送していただき、その後に申込書に添付された郵便振替用紙にて会費をお振り込み下さい。ご入金を確認後、登録内容の通知書、会員名簿、研究年報及び最新の会員報を送付させていただきます。

* 請求書・領収書は原則として発行しておりません。

● 入会金・年会費について

法人会員は年会費100,000円（入会金なし）を下記の銀行口座へお振り込み下さい。

個人会員は入会金5,000円、年会費8,000円（2005年以降）を下記の銀行・郵便振替口座へお振り込み下さい。

法人・個人ともに年会費の期間は入会された年の12月31日までです。

申込書送付先：日本ナレッジ・マネジメント学会

〒103-0022 東京都中央区日本橋室町3-1-10 田中ビル4F (株)日本ビジネスソリューション内

TEL 03-3270-0020 FAX 03-3270-0056

E-Mail kms@gc4.so-net.ne.jp

● 年会費振込先：

1. 銀行口座 口座人名：日本ナレッジ・マネジメント学会 理事長 森田 松太郎

●三井住友銀行 日本橋支店 普通7072689 ●三井住友銀行 日本橋中央支店 普通1085878

●三菱東京UFJ銀行 室町支店 普通3884012 ●三菱東京UFJ銀行 日本橋支店 普通3412822

2. 郵便口座 口座人名：日本ナレッジ・マネジメント学会

●日本橋三井ビル内郵便局 00120-3-12323



2006 January

発行日／平成18年1月26日

発行者／日本ナレッジ・マネジメント学会

編集人／森田 松太郎・高梨 智弘

製作／(株)アイビジネスサービス

個人会員619名、法人会員60社（平成18年1月26日現在）

日本ナレッジ・マネジメント学会 事務局

〒103-0022 東京都中央区日本橋室町3-1-10 田中ビル (株)日本ビジネスソリューション内
TEL 03-3270-0020 FAX 03-3270-0056